The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ホッブス哲学の諸問題
Author(s)	岸畑, 豊
Citation	大阪大学, 1967, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29418
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・（本籍）	岸畑　豊（きしはた　ゆたか）
学位の種類	文学博士
学位記番号	第　1292　号
学位授与の日付	昭和42年11月1日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文名	**ホッブス哲学の諸問題**
論文審査委員	（主査）教授 相原　信作
	（副査）教授 澤瀉　久敬　教授 伊達　四郎

論文内容の要旨

清教徒革命，共和制の設立と崩壊，王政復古というイングランドの動乱期にその後半生を送ったホッブスは，祖国再建の指針として，自らの「人間，及び国家の哲学」を構想し，提案したが，結局不名誉な烙印を押され，弾圧さえ蒙ったまま，忘却されてしまうことになった。ホッブス再評価の動きは様々の角度からなされたが，この小論でのホッブス解釈の基本的な観点は次のところにある。彼は哲学者であり，彼が哲学と呼ぶ一つの学の性格が彼の全体系の基礎としてこれを貫通している事実に注目して，先ず彼のいう哲学を一般的に省察し，その独自の性格を明らかにすると共に，特に彼の本領として評価される「人間，及び国家の哲学」を哲学として理解し，解釈することである。

ホッブス哲学の問題を大きく二つに分けることにする。一つは彼のいう哲学という学の性格を省察し，解明することであり，他はこれに基づいて，人間，及び国家の哲学を哲学として理解することによって，今迄に様々に解釈されながら，未だに定説のない問題，例えば，「万人の万人に対する戦」と表現される自然状態の理論や，国家権力の絶対性の主張に対して一定の解釈を与えることである。

ホッブスは哲学を次のように定義する。「哲学とは諸結果，即ち諸現象の，その諸原因の諸概念，即ち諸生産から，そして逆に，ありうべき諸生産の，その認識された諸結果から，正しい推論によって獲得された認識である」と。勿論，これが彼の哲学の認識の本質であって，一言でいえば，「原因の学」ということも出来る。つまり現象を生産の相の下に論理的に理解しようと努め，この探求を根拠として，現象の原因として存在を認識する学ともいえる。この本質からいって，哲学の対象は哲学的認識の可能であるものにかぎられ，物体と総称される。そして彼の哲学の目的は，「知は力なり」という言葉の示すように，人間の福祉のために哲学的認識を人間の力に転化せしめることである。厳しい内外からの自然の脅威の下で，自己の運命を自ら開拓せねばならない人間の基本的要求に合理的

に応える任務をもつ哲学は，このような目的と本質とをもたねばならぬのである。彼の哲学は，存在を存在するかぎりに於て認識するのではなく，生成，又は生産の論理によって把握できるかぎりに於て対象を認識する。従って，「あなたの精神と全世界との娘である哲学はあなた自身の中にある」といわれるのである。

彼の哲学の本質と目的，及び対象がこのようなものであるとすれば，哲学一般の省察の次の問題は対象とその認識の問題であるが，これを更に二つに分けて考察する。第一は，対象がどのようにして哲学的に認識されるかという事実問題であり，第二は，この哲学的認識の権利問題である。

有名な「構想された全世界の抹殺」の仮定によれば，哲学の対象である物体は，存在としては，我々の思考から独立に存在する「自立存在」であり，我々が直接受容するものは「表象」である。表象を唯一の所与として，論理的に認識される現象の原因としての属性，例えば，「延長」が帰せられるかぎり，哲学の対象は「物体」と呼ばれ，理性によって現象の下におかれたものとして，「スブエクツム」，又は「スッポジツム」とも規定される。そこで哲学の対象認識の事実問題は，先ず彼の論理学を明らかにし，これによって構成される学の体系を考察することによって解明されねばならない。

彼の論理学は三つの能力，即ち，感覚，言語，及び理性から成る。感覚は表象を受容する能力であり，表象が認識の唯一の所与である。それは表象群からなる思考の連続であるが，これを或る意図を以て因果的な連続に変える能力が想像力であって，探求，又は発見の能力と呼ばれる。感覚に於て既に探求の身構えがなされていることは注意されてよい。この探求をより高度のものたらしめる能力が言語と理性という人間に固有の能力である。

我々にとって注目さるべき言語の機能は，想像表象の連続を普遍名称の連続に翻訳して，理性の方法の適用を可能ならしめることである。言い換えれば，それは一方で想像表象と対応しつつ，他方理性の概念に対応して，両者を媒介する記号としての機能である。普遍名称は，その存在についていえば，単なる「名称の名称」にすぎないが，「概念の記号」として機能するとき，論理的に重要な意味を獲得する。彼によれば，普遍名称は「具体的名称」と「抽象的名称」とに分析される。「具体的名称」は，例えば，「物体」，「運動体」等であり，「抽象的名称」はその属性，即ち「物体性」，「運動」等を表現する。属性は理性の概念であり，抽象的名称はその記号であって，この属性の探求と発見とに基づいて，これが帰せられる対象を表現する記号が「具体的名称」である。普遍名称は一方で具体的な個々の表象に対応しつつ，同時に理性の探求と認識の成果である概念と判断等を表現する記号でもあり，論理的認識に相関的な学の対象の記号でもある。これらの記号なしには，ホッブスのいう理性，即ち，直観しない理性はその機能を発揮することができない。

彼によれば，理性は直観せず，専ら計算する。即ち，分析と綜合の方法によって探求し，推論し，発見する。彼の哲学の本質は「原因の学」であるから，理性の方法は専ら原因から結果へ，又は結果から原因へと分析し，要素を発見して，これから現象を再構成する。現象を生産の相の下に理解するというのは，このような方法の手続きを意味している。この場合に物体に対する相対的独立性を属性に与えるという抽象の手続きが並行していることも注目されてよいだろう。これが学の対象をして，独断論と懐疑論を回避せしめる一つの方法であるからである。

論理学を前提として，総ての学，即ち，その体系の基礎となるべき哲学的省察，即ち，現象一般の哲学的認識を任務とする学を，ホッブスは第一哲学と呼ぶ。論理的にいえば，総ての特殊な学の構成の基礎となるべき要素を分析することが第一哲学の課題である。現象一般の現存在と変化の原因を分析して，彼は「延長」と「運動」という基本的属性を発見し，これを物体に帰する。現象一般の原因はこの二つの基本的属性であり，この属性が帰せられる学の対象一般が物体と総称される。

第一哲学が分析した要素から諸学を綜合的方法によって構成することが彼の体系の構想である。ここで我々の注目すべき点は，第一哲学で抽象的に規定された属性が夫々の学に於て具体化されて，属性に固有の諸規定を与えられることと，綜合の方法による分析の要素の検証とである。ところでホッブスの体系構想の特徴は，綜合的方法が同時に演繹的であり，論証的であるところにある。つまり彼はユークリッド幾何学の方法に倣って，定義を前提し，次々に諸学を演繹的に構成しようとする。その際総ての学がいずれも彼の哲学という性格を厳密に維持していて，夫々特有の現象を生産の相の下に認識することを共通の本質としていることが彼の体系を特徴づける。しかしながら彼の意図にも拘らず，この構想は破綻せざるをえない。何故ならば，彼は第一哲学から幾何学を演繹し，それから自然哲学を演繹しようとしたために，「傾動」と共に「延長」を「作用力」の規定要素とせざるをえなくなったからである。実験を軽視し，専ら演繹的一論証的方法に従って体系が構想されたために，彼のこの方法の欠陥が暴露されたのである。しかし綜合一構成の方法は演繹一論証の方法をいつも伴う必要はなく，この破綻にも拘らず，彼の哲学の方法は依然として有効でありうる。演繹的に自然哲学から論証されなかった「人間，及び国家の哲学」が彼の体系で最も優れた部分であることがその証拠である。我々は幾何学，自然哲学の構成によって，物体の属性の諸規定が夫々に具体化されてゆくのみをみることは出来るが，第一哲学が分析した要素が夫々の学の有効な生産原理でありうるという検証をうることは遂に出来なかった。自然哲学の領域で彼が独創的な学者でありえなかった理由がこの方法上の欠陥にあることはいうまでもあるまい。

ホッブス自身の場合は勿論であるが，物体とその属性とは自然哲学の対象，及びその性質の表現として，事実上学的認識に重要な意味をもち，機能を果してきた。それにも拘らず，この二つの普遍名称の意味と機構とは必ずしも明らかであるわけではない。ホッブス哲学に於てもこの二つの普遍名称の解釈はかなり困難な問題であるが，この認識の権利根拠の問題が検討されねばならない。ホッブス哲学に関してこの問題を具体的に表わすとすれば，次のようにいえるだろう。彼は一方合理主義を立場としつつ，他方唯名論の立場にも立っている。従って，この二つの立場の綜合は如何にして可能であるかという問題がこれである。これは通念によれば，パラドックスと考えられているのであるが，この綜合なしには，ホッブス哲学は崩壊せざるをえない。しかし彼自身この問題に答えてはいないのである。そこで，ホッブスの属性がそうであるように，普遍名称が一般に唯名論の立場からフィクション，又はコンメンツムと考えられている点に注目して，フィクションの意味と機能とからこの綜合の問題に解決が与えられることが出来るかどうかを検討することが我々の課題である。

フィクションの意味と機能とを明らかにするために，実証主義に於けるフィクションの系譜を追跡してみると，大体次のような事柄が我々の検討の根拠として指摘されるであろう。

1) 表象説，即ち，フィクションに存在が対応している場合には，フィクションもその機能を発揮

して，意味をもちうるが，現象説に移行するに従って，フィクションの機能は衰弱し，積極的意味を失う。

2) ヒュームによれば，フィクションは現象，又は存在の中に構成根拠をもつことが出来ない。彼の哲学的分析によれば，フィクションが意味と機能をもちうるとすれば，人間本性に根差す認識，及びその原理にあると考えねばならない。

3) ベンタムによれば，フィクションの意味と機能は「表現様式」，即ち，「論理的に必要な貨幣」としての機能にあり，我々が論理的認識を目指すとき，人間的認識の表現様式，及びその機能として客観的実在性をもつ。

4) ファイヒンガーによれば，人間的思考は，人間に合目的的行為を可能にするための，知覚群を素材とした人工的変造としての表象形成物であり，いわば現実在の人間化である。

普遍名称をフィクションと考える点で，ホッブスと実証主義者は同じ立場に立つが，しかしホッブスと実証主義者の相違点は，後者にとってフィクションに対応する存在が欠如しているのに対して，ホッブスによれば，フィクションに存在が対応しているところにある。そこで，問題はフィクションである属性に対応する存在，即ち，物体とは一体何であるかということになろう。ここで我々は物体がスブエクツム，及びスッポジツムと規定されていることに注目する。スブエクツムとは現象の下にあって，その原因である属性の支持者であり，属性が発見されたとき，これが帰せられる論理的支持者，即ち主語であるとともに，まさにそのことによって存在的支持者として想定される。つまりスブエクツムはスッポジツムである。後者はこの論理的支持者であることを根拠に，存在的に「仮定されたもの」であり，「存在自体」に「代っておかれたもの」であって，積極的にはフィクションをその内容として「創作されたもの」である。スッポジツムに客観的実在性を与える根拠は，ホッブスの学の目的とその本質，及び学の方法である。物体はスブエクツムであるまさにそのことによってスッポジツムでもあるという点に，彼の哲学の根抵にある合理主義と唯名論との綜合の根拠があるというのが我々の解釈の結論である。

ホッブスの哲学体系では，第2部が「人間論」，第3部「市民論」となっているが，「法学綱要」や「リヴァイアサン」では，「人間論」と「国家論」とが組み合されていることは周知の通りである。我々もこれに倣って，「人間，及び国家の哲学」としてこれを解釈しようとする。その理由は次の通りである。第1に，彼が「リヴァイアサン」の最初に述べているように，国家の素材となるものも，工作者も共に人間であるばかりでなく，国家自体も人工的人間とと考えられており，国家は完成された人間といってもよく，1つの連続した動的な過程を形成する。第2に，「人間論」は「国家論」の論理的前提であって，両者は論理的にも連続している。従って，両者は独立の哲学ではなく，論理的にも，内容的にも一貫して連続している「人間，及び国家の哲学」と解釈されるのである。

我々は「人間，及び国家の哲学」を彼に固有の哲学として解釈することをその立場としている。先ず哲学としての本質は全く同一であるといってよい。その目的は次のようにいえるだろう。当時の彼の祖国は内乱状態，即ち，人間にとっては悪を，国家にとっては死を意味する状態であった。この状態から脱出して，これから解放された状態，即ち，国家を設立して，人間の自己保存を合理的に実現する社会を構成すること，これが目的である。この目的にとって有効な方法も亦本質的には何の相違

もなく，分析と綜合の方法であるが，唯対象が人間，及び人間の構成する社会という複雑なものであり，又目的も自然哲学に比べると単純でないために，かなりの工夫を必要とする。それは次の2点に於てなさねばならない。第1に，人間は自然物のように機械的必然性に支配されず，目的を立て，これに対する手段を選択して行動する。この意味で人間の行動は自由である。しかし哲学は現象を因果関係の下に理解することを本質とする。従って，自由であるとおもわれている「目的ー手段」関係を「原因ー結果」関係に置き換えねばならない。そのためには，人間の動機を読む鋭い洞察を必要とする。第2に，目的が現象の理解だけではなくて，この状態からの脱出と合理的社会の建設であるために，現象の再構成だけではなくて，これからの解放のための原理と方策とを推論して，論理的に理論を構成せねばならない。「人間，及び国家の哲学」を哲学として構想しようとすれば，大体このような方法上の工夫によって理論が展開されることになろう。

先ず内乱という祖国の現象を理解するために，その原因を分析して，これを再構成することを目指すのが彼の自然状態の理論である。彼の哲学的人間像は彼の次のような定義によって端的に示される。即ち，「人間は生命をもち，感性をそなえた，理性的物体である」と。そして彼の鋭い人間洞察によって分析された人間の基本的動機は次の2つのものであった。第1は「傾動」の人間的形態である「努力」を核心とした自己中心的な情念のメカニズムである。第2は，彼が宗教という情念として分析した動機であって，無力感と無常感に悩む人間が目に見えぬ絶対的な力への恐怖と，運命の確認への希望から，これに対して服従しようとする基本的身構えである。このような動機によって行動する人間が自由と平等とを条件とする人間関係——政治的関係が捨象されていると仮定して——に於てどのように反応し，振舞うであろうか。この思考実験の場が自然状態というフィクションである。

自然状態で展開される人間のドラマは，「万人の万人に対する戦」と表現される。それは最初情念のドラマであり，その原因として，人間本性の中に見出されるもの，即ち，「競争」，「不信」，「誇り」が挙げられる。とりわけ戦をして例外を許さぬ万人の戦たらしめる相互不信は特に注目されてよいであろう。この戦の状態で相互に敵対する人間は，人間よりも怖るべき自然の敵，死に直面する。死，特に「非業の死」は人間本性の否定であり，人間の無意味と無価値との象徴として「第1の悪」と呼ばれる。これから，死よりの自己保存が「第1の善」として自覚される。この正当な目的と，この目的のための手段とが自然権である。しかし自然権が自覚されたからといって，人間が孤立しているかぎり，事態は改善されるどころか，逆に悪化して，人間を自己矛盾に陥らしめる。何故ならば，戦の状態では，人間は正当な目的を主張しつつ，相互にその目的を否定し合うように振舞うからである。

自然状態の理論の哲学的意味は次の2点に要約出来るであろう。第1に，この理論は内乱という現象を哲学的に理解することを目的とする。言い換えれば，人間の合理的関係の原理，即ち，自然法を論理的に推論するための前提として，これに先行せしめられたのである。自然法学派のように，道徳原理は宣言さるべきものではなく，情念が斥けることの出来ぬ原理として推論さるべきものであるというのが彼の主張であって，当時の情念研究に与えたホッブスの哲学的意味がここにある。第2に，彼が自然状態を「万人の万人に対する戦」と表現した意味であるが，次のように言えるだろう。自然状態での客観的価値として死と自己保存とが指摘され，しかも戦が常に死に直面しているが故

に，戦そのものも悪といわれる。従って，例外なく万人が戦の状態にあるということは，人間が例外なく悪の状態にいることを意味している。このような人間の悪の普遍性と，更にこの悪の克服の困難性との故に，我々はこれを「人間悪」と呼んだのであるが，彼の有名な言葉の意味はこの「人間悪」にあるというのが我々の解釈である。

自然状態に於て自己矛盾に直面した人間には2つの可能性がある。1つは自然状態から脱出して，自己保存の合理的方策を採用する道であり，他は自然状態にとどまる道である。前者の場合，自然状態の理論からの必然的な推論によって自然法が認識される。第1の基本的自然法は，希望があるかぎり，平和の追求を指令する。それから第2の自然法として自然権の譲渡が指令され，次いでそのための契約の実行が第3の自然法として指令される。次いで10数箇条の自然法が推論されるが，いずれも戦の原因の除去を眼目とする。このように推論された自然法の体系が彼の道徳哲学の核心をなす。しかし自然法は一方理性の指令であるが，そのかぎりでは本来の意味での法ではありえないとホッブスは言う。理性の指令であるかぎり，自然法は法として人間を拘束しない。法として拘束する自然法は神の法として受けとられねばならない。自然法を神の法として受容する人間集団の表象が「自然による神の王国」であって，人間をしてこの王国の一員たらしめるのは宗教という情念であった。そしてこの王国の一員であることが平和追求の希望の保証となるのである。

自然法が神の法として人間の良心を拘束するとしても，人間の行動をも拘束するには外的保障を必要とする。この保障条件として要求されるのが国家権力であり，更に国家権力が設立されるためには社会契約が手段として必要であるから，この両者は自然法に必要な2条件である。

人間が自然状態から脱出して，国家を設立し，平和な社会を建設するように工作する場合，人間は自然的人間，工作者，人工的人間等として現れる。これらが総て同一の人間であるとすれば，この動的過程に於ける人間の同一性とは何であろうか。言い換えれば，この人間に固有の現象に於て，「人間」の基本的属性は何であるか。我々はこれを「人格」の概念に見出す。人格とは本来「仮面」を意味するが，一般化して，次のように定義される。「人格は，舞台の上や，日常の会話でいう役者と丁度同じであって，扮することは演ずること，即ち，彼自身，又は他人を代表することである…」と。人格とは，ある一定の基本原理に基づく感情，思考，言葉，行動を，役者のように扮して，演ずる者であって，このように扮して演ずること，即ち，「人格性」がこの動的過程での人間の基本的属性と考えられ，ここに人間の自己同一性が見出される。工作者は役者に対する演出者の役割をもち，彼によれば「本人」と呼ばれる。演出者は芝居の筋書を作って，役者に役を割り振るように，本人は社会の哲学的理論を構成して，人間に人工的な役割を指定するが，国家劇では本人も亦市民の扮装で登場するところに特徴がある。自然状態でのドラマが自然的人間の芝居であるとすれば，これに幕を下して，自己救済を目指す国家劇の幕があげられねばならない。社会契約は丁度その幕開きにあたり，ここに人工的な人間としての国家主権者が設立されて，主役として登場する。これが国家，即ち，リヴァイアサンの誕生である。

国家の設立の際の人民の目的が平和な生活に於ける自己保存であったことから，国家主権者の最高義務は「人民の安寧」であることは当然であるが，同時に主権者と人民との利害も一致する筈であり，理性的な主権者はこの義務の遂行へ同時に動機づけられてもいる筈であるとホッブスは言う。この義

務を遂行するための国家主権者の機能は，大別して次の2つからなる。第1は絶対的権力として自然法に従う行動を保障する機能であり，第2は近代国家の統治機能，即ち，立法,司法,行政等の機能である。純粋に抽象的な理論としてみれば，国家主権者に扮して，演ずる人間がその役割を忠実に果すならば，国家という人工的人間は魂を与えられて，自然状態より脱出し，合理的な自己保存を願う市民の願望は満され，人間の生活はここに完成されるかのようにみえる。しかしながら国家主権者には，人民の立場よりみて，1つの根本的な問題が含まれている。国家主権者も人間である以上自然的人格であり，割り当てられた人工的人格と分裂する可能性，否分裂した事実があるばかりでなく，人工的人格として振舞う場合でも，国家権力は人間的権力の人格化であり，人間的権力が常に支配を本質とし，合理的統治とは必ずしも相容れぬものであるために，絶対的な国家権力は常に専制へと傾斜するということである。ホッブス自身この問題を意識して，内乱が象徴する人間悪と悲惨，及びこれよりの解放が他の何物よりも優先する重大事であることを指摘している。これは哲学者の立場からの1つの見識ではあるが，これでこの問題が解決したとはいいきれない。確かに国家主権者は自然法によって神に対して義務づけられるともいわれる。しかし個人の場合との類比によれば，国家主権者を外面的に義務づける保障力が再び必要となろう。しかしこれは論理的循環といわねばならない。この循環を切断する何物かがあるだろうか。彼の理論の中から解答として得られるものは，国家主権者が神の代理者として神に扮して，その役割を演ずる者，即ち，予言者であるという規定である。神が絶対的権力と合理的統治の綜合の人格的表現であると信じられている以上，神の人格化はこの綜合の人格化である。このような人格として予言者モーゼの像が国家主権者の理論に対応していたと考えられる。この問題に関聯して，ホッブスは自然理性によって構成された国家論を聖書によって確認しようとし，国家のキリスト教的系譜を構想する。それは一方教会政策であるとともに，彼の合理的聖書解釈であり，聖書による理論の確認であった。このようにして，彼の自然理性によって構成された「人間，及び国家の哲学」には，出エヂプト記に叙述されているイスラエル民族の長い苦難に満ちた遍歴と建国の物語が対応している。つまり彼の「人間，及び国家の哲学」は，イスラエル民族の歴史が象徴する人間的苦難，悪からの脱出と，これからの解放である社会の構成という動的過程の哲学であり，そして彼が祖国に対しても，この意味でその哲学を国家再建の指針として提案したと解釈される。これが我々の到達した結論である。

近代から現代へ到る時代は，自然，社会共に，様々な学と技術とによる，抽象的，普遍的な力の支配する世界の限りない拡大の時代といえよう。人間の社会関係も亦限りなく拡大し，その関係は抽象化し，普遍化してゆく。このような時代に於て，各時代の人間の根本的な問題からの解放を目的とする「人間，及び社会の学」としての倫理学を考えるとすれば，ホッブスが既に17世紀に据えた「人間，及び国家の哲学」の伝統に立って，基本的に構想され，現代の問題をめぐって構成されねばならぬであろう。我々のホッブス解釈の現在の時点での意味はここにあると確信する。

論文の審査結果の要旨

17世紀は英国にとってめまぐるしい革命と反革命との交錯の時代であり，王党と反対派とのするどい闘争の時代であった。かかるときにおいて人間と国家とについてペンをとったホッブスは，たたかう双方のいずれからも激しく攻撃されるという運命を免れなかった。このことは死後もながく尾をひき，今日なお研究者のあいだにおいてさえ決して定説をみない状態である。本論文は，このような問題の思想家ホッブスを真実の哲学者として，著者自身の哲学の道の先駆者として描き出し，これに明晰な像をあたえんとしたものである。そして著者は，この目的のために，なんら特別の意見の如きものを持ち出すことなく，ただホッブス自身の著作に沈潜し，その言に忠実に聞くことで足れりとしている。われわれがこの論文をよんで，ホッブスにまといついていたさまざまな曖昧な被覆が拭い去られ，1人の確乎たる思想家の姿を見出す感じをもつのは，このゆえであろうと思われる。

まず著者の態度は，本論文の5分2以上が，ホッブス哲学中の最も退屈な部分として多くの研究者によって無視乃至軽視された「物体論」の部分にささげられていることに現われている。一般にひとびとがホッブスの名をきくときに思い浮べるのは，「万人の万人に対する戦」の語によって表現せられる冷厳な人間観であり，リヴァイアサンの題名によって示される野獣にも似た恐るべき力としての国家像である。このことは彼の思想の特色が，自然的事象によりもむしろ人間的事象にあったことを物語る。ここから殆んどすべての研究者に共通の傾向，主として自然哲学の部分である「物体論」を等閑視する傾向がうまれた。

ところが著者は，ホッブスの全体系を精読することによって，この「物体論」の中に，最も重要な哲学的基石を発見し，この基石こそ無数の非難と誤解とにさらされた思想の真相を解明する鍵を提供するものなることを見出したのである。

そもそもホッブスをして，人間および国家にかんする哲学者として重きをなさしめたゆえんのものはなにか。それは，あたかも彼を生前はもとより今にいたるまでさまざまな非難と誤解の目標たらしめたもの，すなわち彼が人間および国家をば自然科学の対象たる物体と本質的に異なることなき物体と考えたこと，言いかえれば彼がすぐれて非物体的とみなされた人間的なものをすべて一様に物質的次元において考察する「唯物論者」であった，ということでなかったか。もしそうであるとすれば，彼の人間および国家にかんする卓抜な思想を知るためにも，彼が物体とよんだものがいかなるものであるかを，彼自身の言葉において深く究明しなければならぬ。このために，「物体論」の研究が必要であり，従来のホッブスへの非難，誤解の大部分がこの点の閑却からくる，と著者は見る。

かくて著者が「物体論」の中に見出したものは，学問なるものは存在を存在するかぎりにおいてとらえるものではあり得ず，一定の論理学によって理性が探究し，認識しうるかぎりにおいてとらえるものであるという根本思想である。ここから，ホッブス自身の使用した言葉に厳密に従いつゝ，フィクション，スッポジツム (suppositum)，スブエクツム (subjectum)，の概念が詳細に展開される。ホッブスは，唯名論の流れを汲む英国哲学の伝統の中にあって，「知は力である」としたベーコンの

功利主義を継承し，学問をもって最終的には人間福祉に奉仕すべきものと考え，学問作業をひっきよう実践に下属するフィクションの形成であるとする実証主義的傾向が強いのであるが，しかも決してその埒内にとどまるものでなく，一歩これを越えている。それが外ならぬスッポジツム，スブエクツムの考え方である，と著者は言う。

たしかにホッブスの自然哲学には，デカルト，ライプニッツに比肩しうる光彩はないが，当時はガリレイ，ニュートンの時代として，自然科学の勃興期であった。この新科学の対象はいったいなにか。ホッブスは哲学者として，この問題に取組んだ。これを存在そのものと考えれば独断的な唯物論となり，実証主義的にどこまでもフィクションと考えると，行きつくところは懐疑論になる。ホッブスは，これを存在自体ではないがその「代りに置かれたもの」，現象を学問的に理解するために，その原因として現象の「下に置かれたもの」として，主観的恣意的なフィクションとは区別されるものである，とする。「物体」というものは，一定の論理学により学問的理性によって存在の「代りに」，そして現象の「下に」置かれるスッポジツムであり，スブエクツムである。

本論文の著者は，「物体論」のこの考え方が，ホッブス全体系を貫流するのを看取する。著者によれば，この思想は，たんにホッブス解釈の基準であるのみならず，時代をこえて現在の哲学，倫理学にとっても大きい意味を有する。ホッブスは存在を物質の次元にひきおろし，精神の独自性を抹殺したという非難と誤解とは，物質があくまで存在そのものでなく，学問的理性によって認識のために存在に代って設定せられたスッポジツムであるという「物体論」の根本思想を忘れたところから由来する。ホッブスは，かかる独断的唯物論者ではなく，逆にかかる唯物論への徹底した批判者であった。著者は，哲学乃至倫理学の任務が科学を万能視し力と権力とを絶対視する物質主義へのたたかいにあると考えるが，通常の見解に反してホッブスは，このたたかいを先駆したのである。

「物体論」において得られたこの視点に立って，著者は，多くの物議をかもし今日なおその解釈において定説をみない「万人の万人に対する戦」の人間観，恐るべき力としての国家観の謎を解明する。この際の著者の方針は，「物体論」におけると同じくあくまで原文に密着してゆくことである。その結果ここでもまた従来の研究が案外に重大な思想を逸していたことが発見される。たとえば人間の情念としての宗教，人間の属性としての人格性など。これらは前記スッポジツムに呼応する重要概念であり，ホッブスにより明白に展開されておりながら，今までほとんど軽視されていたものである。ふつう情念といえば，快楽，利益，権力へのひたむきな追求が考えられる。しかしこの追求にはつねに目に見えないものへの無力感と恐怖感とが裏打ちされている。また人間の言葉と行動には仮面（ペルソナ）をつけて扮する（personate）ということが属し，自己すら自己自身でなくてペルソナ（人格）である（ホッブスはキケロの有名な「自己自身の演出」を引用する）。本論文でくわしく指摘された人間の情念と言動のかかる側面が，人間認識の反省たるスッポジツムの思想につながることを考えれば，スッポジツムを見逃した従来の研究が，ホッブス人間哲学のかかる重要概念を軽々しく扱ったことも当然といえよう。

著者はむろんホッブスが，万人の生れながらの自由，平等，幸福追求の権利をみとめる自然法学派の流れの中にあり，これと共通する考えに立っていることを認める。しかし，自然状態を楽天的に理想化するこの学派の一般傾向とは反対に，彼は，自然状態を「万人の万人に対する戦」として，すな

わちそこおいては，万人の自然的諸権利が相互に激突して非業の死を結果せざるをえない自己矛盾として描出する。人民主権のイデオロギーに傾斜しがちな自然法学派によって肯定的静的にとらえられた自然状態は，党派性を拒む哲学者ホッブスによって否定的動的にとらえられ，人間は，己れの自然的諸権利を守るために，これを放棄委譲して国家という恐るべき権力を創作せざるを得ないものとされる。ここでペルソナの概念が適用される。国家はいかに恐るべきものであるにせよ，ひっきよう人間によって創作された人工的人間であり，権力者は人民によって舞台上に演技せしめられるペルソナである。国家権力の代表者によって圧迫される人間は，実は自己自身によって苦しめられるのである。このように，人間の自己矛盾を洞察して自然法学派の平面的思考の浅薄を批判したのがホッブスであった。

はたせるかなこのような学問的態度は，相争う両党派のいずれからも歓迎せられなかった。人民主権の側はこれを専制君主の弁護と見たし，王党側は，神聖な王権の基礎を人民に求める危険思想とした。90年の生涯を内乱の恐怖の中に生き，それゆえに人間の世界に平和をきずく方法を学問的にうち立てようとしたこの哲学者は，最後に祖国における著作の没収弾圧をもってむくいられる。著者にとっては，時勢に阿諛せず至難の道をえらんだホッブスの姿は，あえて人民主権のイデオローグたることを辞さなかったロックのそれよりも魅力的であるかのようである。彼はしばしば冷かな力の論理に依拠するリアリストと見做されるが，これは彼を独断的唯物論者とすると同じく，哲学の立場を誤解するものである。当時において彼ほど物質的な権力のリアリズムに抗して人間の希望を基礎づけようとした人はない。ただこれをアイデアリズムでなく強固な学問的方法において実現しようとしたのみである。著者はここに倫理学者としてのホッブスを見るのである。

最後に本論文は，ホッブスの人間・国家哲学のうしろにイスラエル民族解放の叙事詩である旧約の出エジプト記の像を重ね合わせる。

自由な自然的諸権利と圧制的な国家権力とのアポリアが解かれ，力と合理性とが合体するためには，権力を担う指導者は，神をおれるモーゼでなければならない。そしてかかる指導者を舞台上に演技せしめる演出者人民もまた目に見えない神に対して敬虔なペルソナでなければならぬ。さきに情念として見出された宗教が全幅的な重要性を帯びてここに登場する。著者によれば，主著の半分以上を聖書解釈にささげたホッブスの意図は，多くの論者のいう如きたんなる教会批判につきるものではないのである。かくて本論文によると，瀆神のゆえをもって神学者や教会勢力から終生追跡されたわれわれの哲学者は，実は見えざる神へのおそれを哲学したのであり，人間の自然的諸権利の主張さえもこれを欠いては圧制の具となることを結論づけた人でもあった。

以上が600枚にわたる論文の素描である。10数年の努力を結集した研究を洩れなく把握し得たとは毛頭思わないが，これが学位に価する力作であるという判定だけは誤まっていない，と信じる。著者は，原文はもとより，英独の研究をあまねく渉猟して随所にこれと対決しているが，冒頭に述べたように，著者の努力により従来兎角曖昧模糊の感を免れなかったホッブス像が払拭され，1人の明確な思想家の面目が解明せられた思を禁じ得ず，その労を多としたい。言うまでもなく学問の道はつねに未完である。本論文の論点たるフィクションとスッポジツム，スブエクツムとの異同，国家にかんして導出されるペルソナの説，あるいは権力と合理性とのアポリアの解決としての宗教，いずれも様々

な次元において無数の難問を予想させる。これらの点について著者がさらに研鑽を重ねられ，大成されんことを期待してやまない。

ここにわれわれは，本論文が文学博士の学位請求論文として十分その価値を有することを認定する次第である。